
STUDY ONE

～中学生の学習支援～

第1章 プロジェクトの概要

1. 「STUDY ONE～中学生の学習支援～」

伏見区を中心に、子どもたちが安心して学習できる空間をつくる活動を行う。

2. 代表者および構成員

・代表者

田中海里 英語領域専攻 2回生

・構成員

戸高雛 教育学専攻 4回生

下西紀輝 社会領域専攻 3回生

今川裕也 教育学専攻 2回生

森田開一 教育学専攻 2回生

立花麻衣子 教育学専攻 2回生

稲岡言美 国語領域専攻 2回生

梨木悠 国語領域専攻 2回生

芦田愛依 英語領域専攻 2回生

白波瀬翔太 英語領域専攻 2回生

西田光 家庭領域専攻 2回生

上松夏林 教育学専攻 1回生

永井菜実 教育学専攻 1回生

森垣奈々 教育学専攻 1回生

横田美莉 教育学専攻 1回生

阪本菜菜 発達障害領域専攻 1回生

村上結菜 発達障害領域専攻 1回生

渡邊鈴佳 発達障害領域専攻 1回生

下里愛子 理科領域専攻 1回生

松井遼太郎 美術領域専攻 1回生

3. 助言教員

伊藤悦子先生（教育学科）

第2章 内容や実施経過など

1. 放課後学習教室 STUDY ONE

時間：毎週金曜日 18：00～20：00

場所：伏見いきいき市民活動センター

STUDY ONEの主な活動は、この「放課後学習教室 STUDY ONE」という学習支援中心の放課後学習教室を開催することである。中学生を対象に呼びかけをし、学習に適した環境をつくって迎える。藤森中学校と連携を行い、子どもへの呼びかけなど、学校と密に連絡を取り合っ子どもたちをより包括的にサポートすることができた。

今年は6月からの開催で、昨年度からの継続生徒に加え、新規募集を行って新しい生徒を迎えた。中学校からの要望や、大学生の人数が増えたことから、途中で追加募集を行い、現在登録者は、中学3年生が14名、1年生が1名の計15名である。毎週ほぼ全員が参加している。毎回の活動では、中学生が学校の宿題や持参した問題集などに取り組む。大学生は中学生が分からないところを教えたり、学習方法を提示したりする。また、居場所としての機能を果たせるように、中学生の話すことに耳を傾け、会話をすることも大切にしている。

今年度はまず連携している中学校の先生と相談の上、コロナウイルス感染対策のための取り決めを行い、以下のとおりにガイドラインを作成した。

- ・体調観察表で子どもたちの体調を確認する。
- ・保護者の参加確認をもらう。
- ・子どもたちの入館時に検温を行う。
- ・中学生・大学生ともに、入館後すぐに手洗いをする。
- ・教室使用前に机、椅子、ドアノブ等を消毒する。
- ・マスクの着用を徹底する。
- ・ドアと窓を開けて常時換気を行う。
- ・問題集や参考書、筆記用具等の貸し借りを

控える。

施設の部屋の使用に定員が設けられたことから、使用部屋数を増やし、ペアごとの机の距離を十分に取ることのできる配置の工夫もした。

休みの際の連絡などは、団体で借用しているスマートフォンを活用した。大学休講で課外活動停止中も、子どもたちと連絡をとることで、つながりを保ち、再開後の不安を少しでもなくす努力を行った。

2. 研究会

2、3回生と伊藤先生を中心に研究会を企画した。1回生を対象に11月11日と12日の2日にわたって開催した研究会では、1回生10名と2回生4名、3回生1名の延べ15名が参加した。子どもの居場所づくり支援事業として活動を展開する、「山科醍醐こどものひろば」を紹介するビデオを視聴した。ビデオの中で取り上げられている「子どもたちが抱える『困り』」や「居場所支援・学習支援」「ボランティアのかかわり方」などについて、自分たちの活動を振り返りながら考えを深め、参加者同士で意見を交流した。

3. シンポジウムへの参加

(1) ユースシンポジウム 2020

9月27日(日)に行われた「ユースシンポジウム 2020 この半年を語ろうぜ」に希望者2名で参加した。今回のシンポジウムでは、4つの分科会が設定されており、分科会ごとに会場を分け、それぞれオンラインでつなぐという形をとった。本シンポジウムは、京都市からの委託事業を展開するユースサービス協会が主催しており、中高生や若者支援に関わる個人、団体スタッフ、サークルやボランティア活動などをしてきた若者など、幅広く参加者を集め、各分科会でじっくり話をする時間を設けた。STUDY ONEの学生は、京都市

下京青少年活動センターで開催された、「活動しても、いいですか?」というテーマの分科会に参加し、ボランティアなどの自主活動の自粛を余儀なくされた今年、自分は何を大切に活動してきたのかを、ゲストの語りから考えた。支援に取り組む他団体の悩みや課題をきき、困難な状況の中でも、できることを探して活動を続ける勇気に触れ、様々な工夫を知ることができた。

(2) 子どもの居場所づくりシンポジウム

11月15日(日)に、ひと・まち交流館京都で開催された、京都市社会福祉協議会主催の「子どもの居場所づくりシンポジウム」に希望者8名で参加した。本シンポジウムは、子どもの居場所づくり「支援の輪」サポート事業についての説明と、コロナ禍における実態調査報告を受けたのち、「子ども食堂」や「学習支援」に携わるゲストからの話をきくというものであった。コロナ禍における取組の工夫や新たな支援の形について学ぶことができた。

第3章 結果や成果など

1. 放課後学習教室 STUDY ONE

STUDY ONEで子どもたちに勉強を教える中で、学習に課題を抱えている子には、基礎的な部分でのつまづきを克服できないまま勉強が難しくなっていく、授業についていけないというケースが多くみられた。今年度の募集では中学校の先生に学習の場を必要としている子を紹介していただいたことで、勉強に対してハードルを感じていながらも、勉強の必要性を自覚している生徒が多く、学習に積極的に取り組む姿が見られた。今年度は、中学生1人ずつに対して大学生の担当を決め、1対1対応で連続的なサポートを行った。この成果は子どもの得意・苦手や課題を把握し、子どもに寄り添った対応ができたことである。また、子どもの変化に気づきやすいといったメリットがあった。一方で課題として、担当

の子ども以外の子どもたちが活動でどう過ごしているか不透明なため、担当の学生が休んで他の学生が代わりに担当する場合に、その子どものことがよくわからないという状況が生じかねない。そのような状況を防ぐために、特に教室ごとで、また全体でも情報を共有し把握するようにした。

現在は参加生徒のほとんどが中学3年生なので、高校入試対策に取り組んでいる。志望する高校や受験方法を聞き取り、過去入試問題集を購入するなどしてそれぞれに必要な受験対策を開始している。14名の3年生全員が高校進学を希望しているが、モチベーションは子どもによって異なる。昨年の反省を踏まえて、高校についての情報を与える機会を設けて、計画的な受験対策を行うことができるように工夫している。過去入試問題集に取り組む中で、学習支援の必要性が過去問題集を解く以前の段階にあると感じる生徒もおり、限られた時間の中でどのように勉強をサポートできるかが課題である。

また、STUDY ONEの活動は今年で4年目を迎え、連携している中学校での認知があがり、参加を希望する生徒が募集定員を上回るということが起こっている。メンバーも増え、活動が拡大しているが、施設の教室に定員があることもあり、全員を受け入れることはできない。大学生の出席率や教室の定員も考慮し、自分たちにできる範囲で責任をもって中学生を迎えられるように、受け入れは今後も慎重に行いたい。

2. 研究会

大学生の知識の補充や意見の交流を行うことができた。今年度はメンバーで集まって話し合う機会がなかなか確保できなかったが、今回はオンラインでの開催を企画しており、工夫して大学生が学びを深めることのできる場をつくっていきたい。

3. シンポジウム

今年度は他団体への視察に行くことが叶わなかったため、シンポジウムが唯一の他団体との交流の場であった。さまざまな支援事業が今年のコロナ禍の中でどのようにサポートを続けたのか、どのような課題がありどのようなニーズがあったのかなどを知ることができた。さまざまな支援の形があり工夫や新しい展開を知ることのできる貴重な機会であった。一方でシンポジウムへの参加は強制ではなく、メンバーの多くが参加できたとは言いがたい。放課後学習教室以外の活動にも意欲的に参加できる働きかけや、情報の共有が課題であると考えた。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

今年度は登録した中学生が途中で退会することが何件かあった。その一方で、担当の大学生との信頼関係のなかで学習意欲を高める生徒もいた。今年の特質として、勉強に意欲的な中学生が多かったため、勉強が面倒だと感じている子には、足を運ぶのが億劫になっていく教室であったかもしれないと感じた。それ以外にも、子どもたちにとってよりよい教室づくりという点ではまだ多くの課題、改善点が存在する。たとえば、生徒同士の学習スペースに距離を取ってはいるが、教室内で話が盛り上がりすぎてしまった子どもがいると教室全体が騒がしくなってしまうたり、勉強していた子どもの集中の妨げになってしまったりすることがあった。コミュニケーションを大切にしつつ、勉強の環境づくりも意識するために、担当の学生が配慮して、全体で心地よく過ごすことのできる教室をつくる必要があると感じる。今後も学生内で情報共有を徹底し、子どもたちがまた来たいと思えるような教室を目指す。

今年は、教室内での課題が上がった際に、どうにか双方に不利のないように対策を練った。昨年度の課題のひとつであった、「居場所

か、勉強か」という葛藤は自然となくなっていた。「居場所か、勉強か」というのは、居場所支援を重視すると勉強がなかなか進まず、勉強を重視すると勉強をしたくない子どもにとっての居場所としての機能が失われるのでは、という課題であるが、このことに今年度悩むことが少なかったのは、居場所としての機能も、学習環境も両方守っていきたいという意識が共有されたためだと感じる。このような意識の変化や気づきは、子どもたちとのかかわりを通して活動の中で得たものである。ボランティアは「助けたい」「やってあげる」という気持ちが先行するが、その先に、自分自身の学びや成長が感じられるものであり、自分たちも、活動から受け取っているものがあるのだと思う。そのことを意識して、発見や考えの深まりを大切にしていきたい。